ノスタル爺さんの奇跡

renta mito

冬のある日、ノスタルじいさんは廊下を歩いていた。廊下の先にあるのは死だった。長年連れ添った愛する伴侶の死。人間ならば誰でも一度は体験する死。それがいま、妻を見舞った。死神がエイリアンのごとき冷たいで、愛する妻の命を鉤爪掴み、時の翁がその鋭い大鎌で命を一刀両断に切った。妻は死んだ。廊下の先にあるのは、そんな命のない妻の抜け殻でしかなかった。それは焼かれ、灰になり、大地に還る・・・。
そして、自分もまた、そんなに遠くないある日、妻と同じように死んでいく・・・生ある者の定め・・・死。
ノスタルじいさんは廊下を進み、夫としての最後の務めと果たした。点火ボタンを押すこと。それが夫として妻にしてあげる最後のことだった。妻の肉体は焼かれ、灰になり、大地に還る・・・。
務めを終えたノスタルじいさんは、ふたたび廊下に出て、廊下をこつこつと力ない足取りで歩き、斎場の駐車場に向かった。

(さて、どこへ行こう・・・)

愛車のシルバーの**BMW**の運転席に座ったノスタルじいさんは、一人つぶやいた。
後の始末は、親族の者がやるように取り決めておいたのだ。彼としては、葬式という人生最後の社会的なしがらみにこれ以上つき合う気になれなかった。
ノスタルじいさんは一人になりたかった。しかし、どこへいけばいいのだろう・・・どこにも行く当てはなかった。家に帰っても家で待っているのは「空虚」。町に行っても町にあるのは「空虚」。気晴らしにドライブでもしようかとも思ったが、そこに見出すもの何か、彼は知っていた。そこにも世界にぽっかりと穴が開いたみたいな「空虚」しかないのは明らかだったからだ。なぜなら、愛する妻を亡くした彼にとって、全世界は巨大なる「空虚」の塊だったのだから。
　BMWのスターターを回したノスタルじいさんは、公園へ向かった。別に大した理由があったわけではない。いや、そんなことはないにちがいない。彼が向かおうとしていた公園は、少なくとも彼にとっては、特別な公園だったのだ。それは港のそばの公園で、そこでノスタルじいさんは初めて妻とデートし、互いに交際を始めてからも会うときは大抵その公園だった。つまり、その公園は、ノスタルじいさんにとっては、忘れようにも決して忘れることのできない思い出の場所だった。それも、彼にとって一番忘れ難い思い出の場所・・・
斎場から公園まで三十分ほどだった。公園に着いて、駐車場に車を停めた彼は、喪服の上にベージュのオーバーを羽織り、力ない足取りで思い出の場所へ向かった。首をがっ

くりとうなだれた寂しげな後ろ姿は、いかにも人生に絶望した老骨そのものだった。
公園内は、アベックや家族連れ、それに外国人などで賑わっていた。鳩が群れをなして飛び交い、寒いけれど海からの潮風が気持ちいい。
港から出て行く貨物船が見える。あの船はどこへ行くのだろう・・・
上海？・・・・それともブエノスアイレス・・・・？
　昔座った、時代がかったベンチはもうなかった。いまでは新しい昔よりずっと洒落たベンチに変わっていた。半世紀近い昔に、彼が初めて妻となる女性と寄り添って座ったベンチがないのは当然かもしれない。でも、どんなにベンチが新しいものに変わったとしても、妻になる若くて美しい彼女と一緒に座ったという記憶は変わらない。ベンチのそばの大きな樫の木がその証拠だ。もし、樫の木がしゃべれるならきっとこう言うだろう。

「覚えているよ。あんたが彼女と一緒にベンチに座って、手と手を握り合ったことを・・」

　ベンチに腰を降ろし、目の前に広がる港の光景に目をやった。ダグボートが行き交い、貨物船が入港してくる。客船もやってくる。港の向こう側の岩壁ではトラックが動いている。どのトラックも小人の国の車のように小さい。そうやって見ていると、意識は自然と川が河口に流れていくように過去へと下降していった・・・。

　真弓・・それが妻の名前だった・・初めてデートしたのがこの公園だったが、初めて出会ってからデートするまでには二年以上かかったことを思い出した。
　真弓と初めて出会ったのは、郭公の鳴き声が印象的だったとある夏の昼下がりのことだった。学校のそばの並木道を家に帰ろうとしていた彼は、海岸べりの散歩道に出た途端、コカコーラを片手に持ちコッカースパニエルを散歩させている二十歳くらいの女の子とばったり出会った。コッカースパニエルは彼の匂いを嗅ごうとして、元気いっぱいに近づいてきた。女の子は鎖を引っぱって行かせまいとしたが、片手にコカコーラを持っていたので思うようにいかなかった。そして、女の子はサンダルを滑らせてずっこけてしまった。主人が引っぱる鎖から自由になった犬は、彼に飛びついた・・・
こうして、二人は知り合った。
でも、その時はそれっきり・・。彼は海外留学へ行ってしまったからだ。約二年間の海外留学を終えた彼が、この公園でコッカースパニエルを連れた真弓と再会したのは、帰国してしばらく経ったときだった。初めて出会った海岸べりの散歩道と港の公園は、と

ても歩いて行ける距離ではなかったが、たまたまその日、真弓は運転免許を取ったばかりということもあって、港まで車でやってきて公園で犬を散歩させていたのである。二人は覚えていて、すぐに意気投合した。そして、いまノスタルじいさんが一人でぽつんと座っている場所で、時を忘れていろんなことを話した。
半世紀近い大昔の懐かしい思い出・・・・。
過去から現実に戻ってまわりを見てみると、そこにあるのは港の活気ある光景だった。ダグボートや港内遊覧船が往き来し、大小の外国の貨物船が出入りし、船のあとを追うようにして、カモメが群れをなして飛び交っている。緑が豊かな公園のほうは鳩の世界だ。あのときは二人で港を眺めていたんだなぁ・・・と思うと、何か胸に寺院の中でジンを一気に呷ったみたいにじーんと込上げてくるものがあった。
それと同時にあることに気づいた。昔のことをイメージすればするほど、その世界に近づいているかのようなのだ。さらに、自分が妻の死の悲しみから離れていくようでもある。何か元気が出てくる・・
悲しみや生きることに対する投げやりな態度を消す力が過去の記憶にはあるのだろうか？メモリーという二つの目では決して見えない観念の暗い森。そこに記憶はすべて残されている。この目で見たものはどんな些細なことでもすべて、フィルム・ライブラリーのように記憶の森・・・メモリーの中で眠っている・・・。
記憶の森の中に入ることは、ノスタルじいさんにとっては**DVD**をセットするみたいに容易い事だった。まず思考回路をオフにする。そして、ただ頭をバカントな馬鹿のようにからっぽにして、イメージが浮かび上がるがままに思い出せばいい。それもセピア色に変色したぼやけた写真のようにではなく、いま現在、目の前にある光景としてはっきりと思い出すように出来る限り努めること。
年寄りになると、追憶に浸ることは・つい億劫・になるのがふつうだろう。しかし、ノスタルじいさんは違った。彼は追憶に浸ることが大好きだった。彼自身の言葉でいえばこうなるだろう。

「私は<むかし>というおかしなお菓子が大好きなのさ。それは単にスイートなだけではない。哀愁という物悲しい苦味があって、とても味わい深いお菓子だからね」

いつからともなしに、みんなから<ノスタルじいさん>と呼ばれるようになったのも、彼は、過ぎ去った昔のいろんな出来事を実にリアルに物語ることができるからだった。それも、昔の出来事を無味乾燥な感想としてシャベルで過去を掘り起こすようにべらべらとしゃべるのではなく、記憶の奥から自然に浮かび上がってくる過去を常に温かい目

でみながら情愛たっぷりに・・。

「あなたって、聞く人の目に実際に見えるように上手にお話しするのね。あなたは言葉の使い方が上手なのよ。それって、一つの才能だと思うわ。それにあなたの昔話、本当にほのぼのするわ。きっとあなたって、過ぎ去った昔を心から愛しているんでしょうね」

「いい過去であればこそ、私は過去を愛することができる」

「つまり、私たちの人生はいい人生だったっていうことね」

二人とも老境に入ったある日、妻とノスタルじいさんはそんな会話を交わしたものだ。が、その妻はもういない。少なくとも彼が生きている現実には・・・。

ノスタルじいさんは再び記憶の細径を下っていった。そう、真弓と一緒に初めてスキーに行ったときのこと。

公園でのデートを数回繰り返しただけで彼はすっかり真弓の虜になってしまった。そんな彼は冬になったら一緒にスキーに行こうと誘ったのだった。白銀の世界で、二人は愛の世界を存分に楽しんだ。まだ若い盛りのノスタルじいさんが急斜面の上のほうから滑降するときのなんと恰好いいこと！あのとき、真弓は真っ白のフィッシャーマンセーターを着ていた。彼がプレゼントしたノルウェー製だ。トランクスはバーミリオンの赤で、左右に白いストライプスが通っていた。そして、五階建てのリゾート・ホテルの洒落たレストランでは、イタリア料理・・・そう、ラザーニャを食べた。その時の葡萄酒は・・・ブルターニュ？いや、違う。ブルゴーニュの年代物の赤だった・・。ロマンチックな蝋燭の明かりをあいだに挟んで、なみなみと注がれたワイングラスをかちりといわせて「スコール！」と乾杯したときの真弓は、本当に若々しくて魅力的な女性だった。そんな彼女に赤いリボンがクロスされた小箱を差し出したときの彼は、外国で二年も遊んだというのになんと初だったことか・・。赤面症の少年か童貞の若者みたいにどぎまぎしてしまい、ろくに舌も回らなかったのだから。あのときのことを振り返るノスタルじいさんは、われ知らず苦笑いしないではいられなかった。それにしても、過去って、なんて美しく、哀しいのだろう。

再び目の前の港に目をやったノスタルじいさんは、妙なことに気づいた。過去の思い出の中に入れば入るほど、生きる活力が湧いてくるかのようなのだ。思い出のベンチに腰を降ろす前の彼は、見るからにぼけ気味の、もうろくに生きられない耄碌したお年寄

りといった弱々しい感じだったのに、それがいまはちょっと違う。何か変化が水面下で始まっているような奇妙な感じ。過去の世界に入るということは火山の火口を覗いたり、川の河口をぼんやりと眺めたりするのとはわけが違うことだけはたしかなようた。
しかし、決して悪くない。楽しい記憶を辿ることには、心はもちろん身体までも若々しくさせるリフレッシュな力があるみたい・・。でも、そんな馬鹿な。記憶は過去。過去は火山の噴火によって火崗岩ができる様に過去に造られた人生のフィルム・ライブラリーのようなもの・・・。いくらそう思っても、ノスタルじいさんの過去へのセンチメンタルジャーニーは続く。真弓とのあいだに起こったさまざまな出来事の断片が、こま切れみされてゴミみなった映画フィルムが再びつなぎ合わされたかのようにイメージとして心のスクリーンに次々と現れては消え、消えては現れてくる。人間が死ぬときに見るという人生のパノラマともいうべきそんな無数のイメージの中で、とくに楽しかったときの情景があるとそれをもっと詳しく思い出そうと、イメージを凝視するのだった。
たとえば、ハネムーンの思い出がそうだ。それはもはや二つの目では決して見ることのできない失われた光景ではあったけれど、心の眼でははっきりと観ることができた。底抜けに明るい青い海が観え、きらきらと夢のようにきらめく砂浜で、二人で手と手を繋いでいるイメージ・・・・。
そのイメージは、ずっと遠い昔の出来事であるとはとても信じられないほどに鮮明だった。じっと耳を澄まし、心を瞑想中の修行者のように鎮めれば、そのときに海のどよめきや自然のささやき、それに潮の匂いさえ感じられそうではないか。
そこまでは細かく入れなかったけれど、でも、ノスタルじいさんはいまでもはっきりと覚えていた。南国の夕焼けが天使の夢のように美しい黄昏時に、自分の妻になったばかりの真弓になんと言ったかを。

「やっと一緒になれた。これからも仲良くやっていこうね」

素直な女の子のように頷いた真弓が、なんと答えたかもちゃんと思い出せる。

「私、本当に幸せ！」

　真っ赤に燃えた夕焼けが美しい砂浜で互いに幸せを確認したとき、一匹の野良犬が自分の前を通りすぎ、続いてぼろをまとった、でも
いかにも健康そうな現地人の子供が裸足で波打ち際を元気よく走っていたのも、ノスタルじいさんはちゃんと思い出すことができた。

やがて夜になり、星が降るようなロマンチックな時間になった新婚ほやほやの二人が、ホテルのスイートルームでどんなふうに二人だけの時を過ごしたかは、いうだけ野暮だろう。二人は心から愛し合った。永遠に夜が明けないでほしい・・・そう願わないではいられない素晴らしい夜・・・。
そうやって、羽が生えて月まで翔んでいけそうなくらい幸せだったハネムーンは終わった。それからは日本という現実に戻り、新婚生活が始まった。ノスタルじいさんは、長い結婚生活をざっと振り返っていったが、しかし、記憶が現在に近づけば近づくほど、思い出をイメージとして思い浮かべても別に生き生きしてこないことに気づいた。
現在に近づけば近づくほど、記憶は柔らかくなるのではないか。ノスタルじいさんはそんなふうに思った。柔らかいという表現は、少し変かな？と首を傾げたが、他に表現しようがないのだ。味噌にせよ葡萄酒にせよ、時が経つほど熟成してくる。記憶もそれに似ているみたい。ダイヤモンドは物質界で一番固い物質だ。それと同じように、一番印象的な思い出は一番固い思い出ではないのか。そうであればこそ、どんなに時間が経とうと、現在までのその輝きは失せないのでは・・・。
きっと、現在に近い記憶をいうのは、現在を引きずっているのだろう。逆にいえば、現在は常に過去に片足を突っ込んでいるということ。少なくとも<いま・ここ>に徹していない限りは。記憶を記憶としてはっきりとイメージ化するためには、現在と記憶が完全に切れていなければならないのだろうか？もし、そうなら、現在から一番遠い、というより、一番奥の・・昔の記憶。これこそ一番記憶らしい記憶ということになりそうではないか。真弓とのそういう古い記憶をイメージ化しているときのノスタルじいさんが、心から浮き浮きしていることを思えばそこには何か力があるのは確かなようだった。
ということは、真弓との古い記憶を熱心な考古学者のようにもっと深く掘り下げれば、当然、その力は増えてきそうにも思われる。でも、そんなのみんな、水に入ったコップの中のストローが曲がって見えるのと似たような錯覚ではないか？？

　しかし、ノスタルじいさんは、再び海底を目指す深海探査船のように古い思い出の世界に入っていったのだから、彼が錯覚と信じていなかったのは明らかだ。ノスタルじいさんの直感は何かがあるとみていたのだ。
ということは、出会いのシーン再びというわけだ。ノスタルじいさんが真弓に初めて出会ったのは、夏の暑い太陽がさんさんと照りつける海岸べりの散歩道でのことだった。足を滑らせて「あっ！」と声を上げたと思ったら、次の瞬間、サンダルの片方がくるくるっと宙に飛んでずっこけてしまった可愛い女の子。そして、茶色のコッカースパニエル。

この二つが彼の記憶に強く焼きついていた。ずっこけたときの真弓の表情を思い浮かべることさえできそうだ。目がシャム猫みたいにぱっちりと見開いていて、美しいというより、男なら誰だって抱きしめてあげたくなるような可愛い二十歳の女の子。「あっ！」と声を上げてずっこける瞬間、スカートがふわりと捲くれ上がっていたのがすごくエロチックだったのはたしかだ。そして、茶色のコッカースパニエルのはしゃぎよう。いま振り返ると、犬は鋭い嗅覚で、二人の出会いがあらかじめ定められたものであることを、ちゃんと嗅ぎつけたのではないかとも思うのだった。
彼が、ずっこけた真弓に手を貸してあげたのが二人の最初の肌と肌の触れ合いだった。彼がそのとき口にした言葉は、

「怪我しなかった？」

「ありがとう・・・」

真弓は可愛らしい顔を赤いポットのようにぽっと赤らめ、長い黒髪を片手でかき上げて恥ずかしそうにそう言い、二人は初めて言葉を交わした。立ち上がった真弓は、スカートをぱたぱたはたいた。そして、若い二人はコッカースパニエルの・・そう、コッカーを真ん中にして、散歩道から浜辺に降りて、海水浴を楽しむ人たちで賑わう浜辺をぶらぶらあるきながらいろんなことを話し・・・・・
白い波がきらきらときらめく海の沖合いには、大きなタンカーが小さく見えた。そのタンカーを見た彼が、(鯨みたいだなぁ・・)と思ったことをノスタルじいさんは思い出すこともできた。そのときの思い出は楽しいというより、わしにもあんな胸をときめかせる純情な時代があったのだなぁ・・とつくづく思わないではいられないような、遠い、遠い、遠い昔の郷愁だった。
　それから二年以上経ったある日、フランス留学から帰った彼は、いま老いさらばえて座っているこの場所のすぐ近くで、コッカーを連れた真弓と偶然再会したのだった。その時も、コッカーがまず自分を見つけたことを思い出した彼は、こうつぶやかないではいられなかった。
(コッカーは、きっと縁結びの神の使者だったのだろう・・・)
それにしても、そのときの真弓のなんという華やかな美貌！もしコッカーを連れていなかったならば、真弓とはわからないといっていいくらい、彼女は二年前よりも美しい女性になっていた。そのとき、彼は初めて真弓という女性に心を動かされたといってもいいだろう。

二人はベンチに座り、鴎や鳩が群れをなして飛び交う港を見ながら、あの日からのことを互いに話した。よく晴れわたった秋、たしか十月・・・十日だ。その日に二人は本格的に交際を始めたというわけだ。
フランス留学中、冬になると、彼はスイスのシャモニーやサンモリッツ滑ったものだった。そのことを話したときの真弓の表情が忘れられない。夢見るようにうっとりとしいて、まるで背中に羽が生えているような気分で聴いてくれる。これでは話すほうも話し甲斐があるというものではないか。そうやって、話しを聞いている真弓表情がまた、すごく可愛い。最初に見たときは、すごく美人になったな、と思い目を見張ったが、時を忘れて語り合い、お互いに手と手を握り合うその時分には、真弓ってやっぱり可愛らしい女の子じゃないか。と彼は思ったものだった。そして、そのとき、美貌というのは例外はあるとしても要するに化粧によって作り上げられた人為的な美しさではないか、と思ったことも、いま、再び思い出したのだから、ノスタルじいさんの記憶力がどんどん活性化しているのは間違いなかった。その変化が何か見られるだろうか？別に、いや、待てよ。と、ノスタルじいさんはオーバーのポケットに突っ込んでいた両手を目の前に持ってきて、よく見ながらつぶやいた。
(両手の皺が少なくなってきたような気がするが、気のせいだろうか・・・？)

「よぉ！」

薄汚いアノラックを着た一人のみすぼらしい男から声をかけられたのはちょうどそんなときだった。ノスタルじいさんが頭を上げると、目の前に立っていたのは、何ヶ月も風呂に入っていないような中年男だった。髪はぼさぼさで無精髭を生やしている。典型的なホームレスといったむさくるしい感じ。ところが、どういう風の吹き回しか、その乞食同然の中年男はにこにこしながら瓶を差し出すではないか。

「生命の水、ぐいっとやんなよ」

「生命の水？」

「アルコールに決まっているじゃないか」

ノスタルじいさんは生粋の紳士だ。だから、いきなり目の前に現れたどこの馬の骨だか

分らないホームレスが差し出す安酒なんか呑むはずはなかった。が、そのときは、紳士にあるまじき真似をした。酔っ払ったホームレスをじっと見て、それから瓶を受け取り、一気にらっぱ呑みしたのである。喉が焼けるように熱いところをみると、かなり強い酒なのは間違いない。呑み終わったノスタルじいさんは、「ふー」と息を吐き、お礼を言って瓶を返した。
薄汚いアノラック姿のホームレスは、にっこりと笑って瓶を受け取るや、自分でもひと口呑み、「じゃあな！」と言って、ふらふらと行ってしまった。それを見送るノスタルじいさんは、首をひねらざるをえなかった。
(これって、いったい、どういうこと？)
結局、こう考えて納得した。あの酔っ払らったホームレスが気まぐれを起こし、自分もまた気まぐれを起こしたにすぎないと・・・。
　港は黄昏時を迎え、公園の遊歩道を散歩する人たちのペースは、何か速まってきたかのようだ。一羽の鳩が河豚のように体をふくらませて、目の前をいかにも空腹そうにくうくう鳴きながら人なつっこそうによちよちと歩いている。港には一隻の客船が入ってきた。見覚えのあるとても美しい白い船で、まさに客船美といってもいいような外国航路の豪華客船だ。その乗客は金持ちや資産家の年寄りが大半を占めているということを、ノスタルじいさんは知っていた。なぜなら、ほんの数年前、彼もまた妻と二人で乗船して八十日間世界一周の船旅に出たことがあったからだ。妻との回想シーンに浸っているときに、その船が自分の目の前に出現するとは偶然としてはちょっと出来過ぎているように思ったノスタルじいさんは、船の形をよく見た。
(間違いない。妻と私を外国に連れて行ってくれた船だ)
その船旅に出る頃の彼らは、結婚してすでに四十年以上経っていた。そのような資産家の老夫婦がどんな夫婦関係にあるかは、推して知るべしだろう。いくらノスタルじいさんが優しい心の持ち主だといって、四十年以上優しさを同じように保つことができないとしても、それは彼の責任ではないだろう。時は、ちょうど水滴が気の遠くなるような長い年月をかけて岩を穿つように、幸せな日々にひびを入れ、知らないうちに愛を冷えさせてしまう。老後という人生の<牢獄>に閉じ込められてしまった夫も妻も、互いに<北>という字のように背を向け合い、背中と背中のあいだには冷たい北風がひゅうひゅうと吹いているような寒々とした関係。知り合ったばかりの頃の新鮮さはとっくの昔に風に吹かれる古新聞さながらに消え、ゆるやかに互いを愛する歳月も夢のごとく過ぎ、二人はめいめいてんでんばらばらに生活しているといった全然温かみのない関係。一言でいえば、アンニュイとマンネリズム。それも、飽き飽きした秋が過ぎて冬を迎えたような・・・・。

八十日間世界一周の船旅も、そんなアンニュイとマンネリズムから解放されて、ふたたび新鮮な気分を取り戻したいというノスタルじいさんの心の反映なのは明らかだろう。しかし、そんな彼の気持ちとは裏腹に、その豪華客船による世界一周クルージングは、二人の結婚生活の最後の旅となってしまった。そのクルージングの時、妻は癌であることが判明したからだ。乳癌だった。
それを知らされたときの彼は、ひどいショック状態に陥った。まさに脳天をハンマーでがあーんとやられたみたいな感じ。そのときのイメージとして、病院の薄暗い廊下がまず浮かんだ。廊下の突き当たりには両開きの扉があって、扉の上に<手術中>というサインが妙に意味深長に輝いているイメージ。手術は成功したが、癌は転移していたため、妻は全命幾許もない身体になってしまったのだった。
そのとき、手術室で女性の豊かさの象徴でもある乳房を切り取られようとしていた妻のことを思うと手術台の上に寝かされている妻の気持ちがわかるようで、目頭が熱くなるのを禁じ得なかった。
　ノスタルじいさんは目を閉じたまま首を左右に振った。さっき、酔っ払ったホームレスからもらってらっぱ呑みした酒がよくなかったのだろうか・・と考えながら、目を開けて、外国航路の客船が入港しているのを認めるや、いや酒のせいじゃない。と自分で考えを訂正した。いやな過去、悪い思い出はよくない。それらは気分を憂鬱にし、意識を落とし、老化を促進させる。心が浮き浮きするような楽しい過去、素晴らしい思い出。それらをいっぱい思い出そう。現にこの場にあるかのようにリアリティたっぷりに。そうすれば、心はどんどん軽くなり、それにつれ活力も湧いてくる・・・。そう、スキー場での思い出・・・。

　白銀の世界でのスキーは最高に楽しかった。抜けるような冷たい青空には、冬の太陽がまぶしく輝いていた。ひと滑りする前に、サングラスで太陽を直視したことも、彼は思い出した。そのとき、まだ小学一年生の頃、虫眼鏡で太陽光線を集めて紙を燃やし、あやうく火事になるところを父親に怒られたことを思い出したものだ。そのことも、ノスタルじいさんは今思い出したのだ。
そのスキー旅行で一番印象に残っているのは、婚約指輪を渡したことだった。キャンドル・ライトに照らされたテーブルの向かい側の真弓が、赤いリボンが可愛らしい紐を解いて、白い小箱を開けたときのこと。小箱の中の誕生石エメラルドを見た真弓のまなざしは、エメラルド以上の煌きだった。真弓の本当に幸せそうな表情は、いまでもはっきりと脳裡に焼きついている。だから、いま目の前に真弓を見ているかのようにイメージ化できる。

そのとき、照れかくしに、こんなジョークを言ったことをも思い出した。

「婚約指輪というのは日本語だよね。英語ではエンゲージ・リング。ということは、日本人と英語圏の人の婚約の場合には、婚約リング、あるいは、エンゲージ指輪っていうのが正しいのさ」

この馬鹿げたジョークを聞いた真弓は、ぷっと噴き出し、それから身体をのけぞらせて笑ってくれたものだ。幸せなら、どんなにつまらない駄洒落でも笑い茸を食べたみたいに大笑いできるのだろう。

「こんな高価なモノ、いただいちゃって、私、なんてお礼いえばいいのか・・わからないわ。私みたいな蓮っ葉にはもったいないわ・・」

真弓は嬉しそうに謙遜し、それからはいつもの朗らかな口調で、

「私、あなた好き。ありがとう」

と続けて、頭をぴょこんと下げるのだった。
　二人の手は、テーブル越しに優しく握られた。愛する男と愛する女の二つの手の中央では、エメラルドが神秘的に光っていた。キャンドル・ライトを乱反射した緑色の宝石は、たしかに美しかった。が、それ以上に美しかったのは真弓だった。とくに、シャム猫のような大粒の両眼の微笑みが最高にいい。そこには命の燃えるような輝きがあった。<いま>という一瞬が永遠の世界で、最高に幸せに燃えているかのような命の輝き、恋することの喜び、愛し、愛されていることの幸せ、生きていることの素晴らしさ。それらが真弓という女を生き生きと輝かせている・・・。
ああ、美しい過去は記憶の中に埋もれた人生の宝石・・・まさにその通りではないか。あのときはなんと楽しかったことか・・・喜びも、幸せも、若さも、すべてがきらきらと輝いていた・・・。
が、いまとなっては、すべて夢のよう。そして<夢>は<ム>でもあって、<ム>は<無>・・・夏の夜空にぱっと花開き、次の瞬間には散ってしまう儚い花火のようにそれらは消えてしまった。そして、花火のあとにあるのは漆黒の闇。人生もそれと大同小異ではないか。
いま、自分は人生の<ローカル線>に乗って、がたごとと死へ向かっている。四十年以

上連れ添って喜怒哀楽を共にしてきた妻は、すでに人生の終着駅に着いて、闇の中に消えた。でも、まったく跡形もなく消えてしまったというのではない。妻はさまざまな思い出を残していった。そして、それらは重い石のように彼を押しつぶそうとしているかのようでもあった。この世から永久に消えてしまっても、思い出の中で妻は『スウィート・ノベンバー』のサラのように、いまもって若々しく、生き生きと笑っている。そういう過去のいろんなスナップショットがすごく重いのだ。きっと、記憶の森・メモリーに住んでいるであろう<リメンばあさん>なら、こうぼやいて溜息をつくだろう。

(思い出は、重いでぇ・・・)

その代わり、なんだか、身体はどんどん軽くなってくるような感じ。そして、それとともに漆黒の闇が少しずつ遠ざかっていくみたい・・・

　目の前には港が見えた。冬の黄昏時の港の風景は、何か物悲しくて哀愁的だ。港がエキゾチックなのは異国からやってきたさまざまな船のせいばかりではないだろう。港が開港して以来、長いあいだにやってきた数多くの外国の船の面影もまた、港を異国的にしているに違いない。それらもまた、掴みどころのない過去の世界の中に永遠に消えてしまってはいるけれど、でも、それらはなんらかの痕跡を残し、見えない霧のように港全体を包み込んでいるのかもしれない。記憶もまた、そのような神秘的な一面を有していないと誰がいえよう。
　<いま>という一瞬の中には無限がある。時空を超越した本質から観れば、過去も現在も未来もないのかも・・・そう、何もないのだ。
ただし意識を除いて。われわれの世界。われわれの宇宙。それらは意識なのではないか。そして、イメージは意識から生まれる。そういうイメージの鮮明度が高品位テレビの画像よりもっと細かい網の目で再生されれば、イメージはそれだけ現実という<幻>、まぼろしという<幻実>に近づいてくるのではないか。そして、イメージの鮮明度がもっと緻密になって、現実と同じレベルになったとき、イメージはイリュージョンの域を超えて、現実化すろのでは・・・？
ノスタルじいさんの使い古されたコンピュータともいうべき脳の内部では、そんな突拍子もない思索が活発に行われていたのだが、頭がかなり爽快なのが不思議だった。きっと、楽しい思い出をいろいろ思い出しているので、死にかけていた古い脳細胞がどんどん活性化しているのだろう。二度と開けられることはないと思われていた記憶の扉が一つ一つ開けられていくみたいな感じ。そうやって、古い脳細胞をどんどん活性化して

いけば、ひょっとすると、頭はますます爽快になって・・・いや、まさか・・・。
　豪華客船はすでに桟橋に接岸していた。ほとんど白に近いクリーム色のその大型クルーザーは、どこからやってきたのだろうか？そんなことを考えながら、ノスタルじいさんは巨大な人工的動物を見るようにその豪華客船を見た。そして、ここでも一つの変化を認めた彼は、自分の目を疑った。
その大型クルーザーのスマートにとんがった舳先の少し下には、アルファベットの金文字で**<ACAPULCO・MARINE>**と記されてあった。それがすんなり読めたことに驚いたのだ。つまり、視力がよくなっている・・・。ノスタルじいさんは、もう一度、船名を読んだ。アカプルコ・マリン。はっきりと読める・・。
数年前に妻と世界一周の船旅に出発したのもこの港だった。そのとき、乗船の前に彼と妻は思い出のベンチに腰かけ、これから乗船する船名を読もうとしたが、読めなかったことを認めざるをえなかったものだ。それから数年も老化が進んでいるはずなのに、視力は逆によくなっている。

(これ、いったい、どういうこと？)

　彼がそんな疑問を抱えたとしても当然だろう。ノスタルじいさんは両手で頭を抱え、正面の港を見た。そして、ここでもまた別の変化を認めた。両手は白髪混じりの薄い髪を掴んでいたのだが、その薄さが何か変なのだ。はっきりいえば、もはやいつものように薄くない。髪の感触も艶やかになっている。そして、頭皮の中で何かが活発に活動しているみたいなむず痒い感じ。ノスタルじいさんは、両手で髪の毛をむしって見てみた。白髪の数が少なくなっている・・・
。
　若返りつつあるのは、もはや疑う余地はない。楽しい過去をいっぱい思い出せば、そして個々の思い出をできる限り細部に至るまで思い出せば、脳細胞はますます活性化していき、そうやって脳が元気になればなるほど急速に若返る・・・。民話に出てくる若返りの泉の水を飲んだわけではあるまいし、そんなこと、間違っても西から朝日が昇ることなどありえないこの現実で、どうして考えられよう。
これでは『エンブリヨ』の逆バージョンではないか。でも、ほかにどのように、この不思議な若返りを説明できよう。
そこまで考えたノスタルじいさんは、急に一つのことを思い出した。さっき、薄汚れたアノラック姿のホームレスから酒瓶を受け取ってらっぱ呑みしたとき、あの酔っ払いのホームレスがいきなり言った言葉を思い出したのだ。

「生命の水、ぐいっとやんなよ」

ノスタルじいさんは、「生命の水」という言葉がどうも引っかかって仕方なかった。
ひょっとして、それは若返りの泉の水であって、自分は魔法使いが姿を変えたホームレスと出会ったのではないか・・？
真相はわからなかった。はっきりしているのは、ノスタルじいさんは確実に若返っているということだ。ふつうの人ならば、理屈を勝手にこねくりまわして納得させようとするだろう。しかし、ノスタルじいさんは違った。彼は考えることをやめ、イメージを極力鮮明にしようと務めるのだった。
鮮明にしようとしていたイメージは、彼の人生にとって最高に幸せだったハネムーンのこと。椰子の木の生い茂る南の島への新婚旅行。光がとろけるようなトロピカルな島の海辺にそびえる八階建て白亞のホテル・・・。えーっと、なんていうホテルだったっけ？そうだ、<ホテル・ブルーコーラル>。そして、その最上階の888号室・・・
天蓋付きのふわふわのダブルベットには、淡い金色のベットカバー。サイドテーブルにはピンク色の電話と水晶のようにきれいなガラスの灰皿。フラミンゴの長い首を連想させる洒落た水差し。部屋の片隅の小卓には、花瓶にブーゲンビリアの花がいっぱい咲いてて、その上の壁にはゴーギャンの複製画がかかっていた・・・。たしか、『ネバ・モア』・・いや、『われら、いずこより来たり、いずこへ行く』だ。それから、広いヴェランダに出て眺めたもの・・・。もちろん、あの母なる海だった。頭上には、南国の暑い太陽が眩しく光っていた。砂浜がゆるやかに弧を描いて、遠くの岬にまで続いているのが眼下に小さく見えた・・・。
そんな岬をうっとり眺めながら、妻になったばかりの真弓は、好奇心旺盛な無邪気な女の子のように、こう言った。

「あの岬の彼方には何があるの？」

なんと答えたかといえば・・えーっと・・と目を閉じたまま首をひねったノスタルじいさんは(・・あっそうか)と口走って、こう答えたことを思い出した。

「岬の彼方にあるのは海だよ。生命の源でもある母なる海。はるかずっと彼方の大陸にまでえんえんと続く大海原さ」

そして、彼が「フランス語では<母>と<海>はともに<ラ・メール>で、同音異義語なんだ」と説明すると、真弓は、こう言って頷いたものだ。

「たしかに、漢字の<海>の中には<母>という字が入っているわね」

そのあと、地球が丸いことがわかるような広大な地平線に目をやりながら、彼が世界で一番愛している女性が夢みるように口にした言葉も、ノスタルじいさんははっきりと思い出すことができた。それはまるで、実際にあのときの真弓の声が聴こえてきそうな感じだった。

「すごくロマンチックね。地球って本当に美しい星なんだって。私、いま初めて知ったわ。」

　そうやって、ノスタルじいさんは、遠い昔の一週間のハネムーンについて最大漏らさずイメージ化していくのだった。最初のうちは意識的に思い出していたのだが、思い出の中に深く入れば入るほど、自然に、それまでは忘れていた細かいことまで思い出すことができることに気づいた。まるで記憶という水脈から過去を汲み上げているみたいな感じ・・というより、自然に湧き出てくるような感じなのだ。
　目を開ければ、街はすでに夜になっていて、ネオンサインがまたたいているのに気づくだろう。ベンチの前を、互いに寄り添って散策しているアベックが、目を閉じて郷愁の楽しい世界を旅している老紳士を不審なまなざしで一瞥しながら通り過ぎていることにも気づくだろう。そして、気づけば、ノスタルじいさんは、公衆の面前ではつねに礼儀正しく振舞うこと根っからの紳士だから、喪服の上にオーバーを羽織ってベンチの上で酔っ払いみたいにだらしなく足を投げ出している自分を恥じるだろう。そして、冬の寒さにも気づき、オーバーの襟を立ててそそくさと自分の**BMW**に戻るだろう。
しかし、それは目を開けた場合のこと。現象界からの視覚的情報を一切遮断しているノスタルじいさんにとっては、現実はたしかにまやかしのマーヤでしかなかった。目を閉じてしまえば、そんなものは何もない。彼にとって、現在とは過去であった。そして、過去は昨日も、真弓と初めて出会った半世紀近い大昔も、同じようなものだった。時間と距離は関係なかった。心で生きて心が宇宙とつながれば、人はどこにでもいついかなる時代にでも、あの時を超えて生きるウルトラタイムタイガーのティモシーのようにすーっと行けるようなトランスパーソナルな感じ。
無時間で無尺度で無方向。それが心の世界であって、そんな心の世界には、病人の糞み

たいな<分秒刻み>の時間も、泡みたいに儚い<アワー>なんていう時間もないということ。インターネットで瞬時に地球の反対側とアクセス可能なのと同じように、心もまた過去と繋がることができる。意識から生み出されるイメージのリアリティーが現実と同じレベルになったとき、心はイメージとつながる。そのときが奇跡の時。そして、奇跡の時には、どんなことが起こるのだろうか？ミラクルのように未来が来るのか？カの神が眠っている不思議な鏡が出現して、アリスやドクターパルナッソスみたいに鏡の世界に入れるのか？それとも・・・あの可愛い二十歳の真弓、コッカースパニエルのコッカーを連れた、まだ恥じらいが十分あるけれど意外に積極的で好奇心旺盛でもあった真弓と出会うことができるのだろうか？

　ノスタルじいさんは、そんな夢みたいなことをふっと思ってはみたけれど、それは夜空を掠める流れ星のごとく、広大無辺なメモリーという記憶の森の上空の彼方に消えていくのだった。

ノスタルじいさんは、ふたたび過ぎ去った過去世界へ入っていった。そうやって、楽しかった思い出の世界をタイムドラベラーさながらに旅するにつれ、イメージはたしかに少しずつ膨らみ、密度も濃くなっていくかのようで、現実と同じレベルに近づいてはいった。けれどもイメージと現実とのあいだには、アビスのごとき無限の深淵が口を開けているみたいな感じでもあった。

どんなに楽しい思い出を数限りなく追体験しても、また、個々の過去の出来事のディテールにどんどん入っていっても、それだけではイメージを現実化させることはどうもできないようだ。所詮、過去は過去。半世紀近い昔に鳴いた郭公は、あくまでもメモリーの森で鳴くばかりで、やっぱり、現在に実在させることなんてできないのだろう。若き日のハンサムで恰好いい確固たるノスタルじいさんは、過去という目に見えない括弧の中に閉じ込められているのではないか。何人もまだ足を踏み入れたことのない記憶の森の暗い奥のどこかで・・・。そう、奇跡なんて所詮、バウンドしたボールのように何かが素早く動いたあとに残る<軌跡>のことなのだろう。そんな軌跡もまた、過去なのは明らかだろう。そんなふうに考えていたときだった。ノスタルじいさんの直観があることに気づいたのは。

ノスタルじいさんは、妻との出会いから結婚までのあいだに起こったとくに印象的な出来事を二度にわたってイメージ化した。二度目のハネムーンのイメージは、もう少しで現実レベルと同じになるところまで彼のイメージ化は上達した。が、技術は万能ではない。０と１のあいだには無限がある。その無限こそ問題だ。心がイメージとつながる為には、単なる楽しい思い出だけでは、所詮無理なのだ。何が必要か・・・。

(心の躍動)

そう、ノスタルじいさんは、イメージを現実化するためには心の躍動がどうしても欠かせないということに気づいたのだ。
彼が真弓に対して一番心が躍動した時。その記憶に焦点を絞って、まずはできる限り鮮明に再現する。画素数をどんどん増やしていくのだ。そして、決定的に重要なのは、
イメージ化の中で実際に体験した心の躍動に極力近づくこと。そうすれば、ノスタルじいさんの心は実際に初々しく、つまりヴィヴィットに微動し始め、さらに振動し、そうやってどんどん振幅を大きくして・・ある瞬間、躍動す
る。
どこに行くかは明らかだろう。鮮明にイメージ化された場面。そこに躍動した心は飛び込む。そのとき、心は現実とイメージのあいだのクレパスのごときギャップを一気に飛び越え、イメージと心は繋がる。というより、ちょうどピグマリオンやピノキオに命が吹き込まれるように、イメージに魂が吹き込まれるといったほうがわかりやすいだろう。それはイメージが命を有して生きるということでもある。そのときこそ、奇跡が起こる瞬間だ。
ノスタルじいさんの直観は、このことを把握した。そのことがわかった彼のやるべきことは、真弓に対して一番心が躍動したのはいつだったかを、記憶の中を走査して突き止めることだった。もちろん、心が躍動したときはいっぱいあった。でも、その中でただ一つ選ぶとしたら何か・・・？
ノスタルじいさんは、それが何か知っていた。走査する必要などなかったのだ。にもかかわらず、そのことをこれまで思い出さなかったのは、別に大した理由があったからというわけではなかった。ただ、それがあまりにも子供っぽかったから・・・。

真弓との初めてのくちづけ・・・・。

それが、ノスタルじいさｎにとって真弓との半世紀近い付き合いにおいて、一番心が躍動した時だったのだ。
海岸べりの散歩道で、真弓が「あっ！」と声を上げてずっこけ、コッカースパニエルのコッカーが彼に飛びつき、そして、真弓を起こすために初めて彼女の手に触れた、あの夏の日の懐かしい思い出・・。
かんかん照りの砂浜を、二人はコッカーを真ん中にして散歩した。コッカーは元気よく二人をひっぱっていった。海辺では大勢の人たちが寄せては返す波と戯れ、子供達は、

砂遊びに夢中だった。沖のほうでは、サーファーが大きな波に乗って、実に上手に踊っていた。さらに、ずっと沖のほうには、鯨みたいに大きなタンカーが小さく見える。真夏の海はきらきらと煌き、潮風は気持ちよく、水平線の彼方に入道雲が雄大に湧き上がっているのが、いかにも夏らしい。
二人は、海からの潮風に肌を刺激され、頭上を舞う鴎の甲高い声に刺激され、砂浜で水着姿で歩いたり、甲羅干ししている若者たちの肉体に刺激され、それからまた、どこからか聴こえてくる音楽・・・
そう、エリック・クラプトンの『コカイン』に刺激され、さらに、夏という開放的な雰囲気がもっている、裸になって肉体を太陽に捧げたいという、大自然が生み出す得体の知れない野生的な力に刺激され・・・そうやって、若い二人はふらっと廃船の影に行って、そして、初めてのくちづけ・・・。
ノスタルじいさんは、そのときのことを、鮮明にイメージしていった。真弓のシャツは白いティーシャツで、プリントされた模様は、たしか・・・そう、ハイネンケンのロゴマーク。スカートは膝頭を少し出した黄緑色のスカート。それに淡いピンクのサンダル。
真弓は、シャム猫のようなつぶらな瞳で、彼を好奇心旺盛に見つめていた。口紅もマスカラもマニキュアもなし。健康そのもののようによく日焼けした形のいい顔。品のある小さな鼻。しっとりと濡れた。怖いくらいな蠱惑的な唇。下唇の斜め右下にある小さなホクロ・・・。
そして、自然に左右に肩まで伸ばしている艶やかな黒髪が、潮風になびいていた・・・。
それからもう一つ、真弓の下着が下着が白だったのも覚えていた。
声を上げてずっこけて、スカートがふわりと捲くれ上がったときにちらっと見えたのだった。紳士であるノスタルじいさんは、下着の色のことまでは思い出したくなかったのだが、死につつある脳細胞を一つでも多く活性化させるためには、紳士もへったくれもあったものではない。あの浜辺でのことは、どんな些細なことでも思い出さなければならないのだ。廃船に真弓をそっと押しつけ、軽く、そして強く唇と唇を合わせたときの、あのほんの数秒間に味わった心の躍動に関するすべてのことを。夏の青い空、入道雲の形、さんさんと輝く太陽の暑さ、白い波が寄せては返す海、沖合いの鯨のようなタンカー、サーファー、水着姿の若者達、子供のはしゃぐ歓声、砂浜の砂の暑さ、クラプトンの『コカイン』、海のどよめき、鴎の甲高い鳴き声、潮の匂い、真弓の愛犬・コッカーの表情、そして、真弓・・・・。

　ノスタルじいさんはいまや、完全に郷愁の世界に没入してしまっていた。こうなると、もはや郷愁というより<狂愁>といったほうがよさそうではないだろうか。しかし、狂愁であればこそ奇跡は起こりうる。やるなら全身全霊を上げて、身も心も過去の中に全部ぶち込み、過去と一体になる。そのとき、過・現・未の区別はなくなり、一瞬と永遠は一つになるだろう。そう、すべては一つ。イメージも現実も一つ。現実も幻も。生も死も。無も無限も。そして、彼も彼女も一つ・・・。

人が自分の持っている力を出し切って何かに向かえば、ひょっとしたら不可能なんてないのかもしれない。人も世界も宇宙もすべてが意識からできているならば、そんな意識を上手に活かすことによって、人は限りなく絶対に近づくことができるのではないか。そして、絶対に近づけば近づくほど、いろんなシンクロニティー、さまざまなマジック、数々の奇跡も起こりうる。そう、あのインドの孤高の聖人が言うように、

<私は世界であり、世界は私だ>

ということ。

こうして、ノスタルじいさんはとうとう来るところまできた。あのときの現実に限りなく近いイメージ。そして、そこに心が飛び込んだ瞬間、奇跡は起こった・・・・。

　どこからともなく、郭公の鳴き声が鳩時計のように聞こえてきた。そして、鴎の声が甲高い鳴き声が聞こえ、さらに、コッカーの吠える声も聞こえる。潮の匂いもする。そうかと思うや、ベースがばっちり効いたクラプトンの「コカイン、コカイン、コカイン・・・」
というけだるいリフレーン・・・。それに海のどよめき・・・。それらがすべて同時に、あたかも記憶の玩具箱をぶちまけたかのように聴こえ、匂い、そして、それらにつられるようにしてノスタルじいさんは目を開けた。目の前には・・・真弓。

二十歳の初々しい可愛らしい女の子。三年後には妻となり、四十年以上苦楽を共にし、そして、つい数日前にこの世から永遠に消えてしまった真弓。真弓は艶やかな黒い髪を左右に肩まで垂らし、好奇心いっぱいの目でこっちをじっと見ている。唇をほんの少し開いた彼女は、まるで彼が行動を起こすのを待っているかのようだ。キテイルティーシャツのロゴマークは、たしかにハイネンケン。そのティーシャツとスカートの裾がほん

の少し潮風になびいているのが、唯一の動きのようでもあるけれど、よく見ると、ふっくら膨らんだ胸元も確実に鼓動している。
真弓のまわりには、砂浜、海、波、空、雲、風、太陽・・・があった。ずべてがきらきらと煌いている。暑い夏だ・・・。
ノスタルじいさんは、真弓に近づいた。ちょうど初めてのときとまったく同じように。
そうやって近づき、真弓のしっとりと濡れた唇に自分の唇をそっと触れた・・・・。
二つの存在が触れた瞬間、世界は裏から表へと引っくり返った。そう、夏から冬へと、昼から夜へと、町外れの海辺から港へと、そしてノスタルじいさんはハンサムな若者へと・・・。

そして、その若者のなんと恰好いいこと！！！